Zero Sum Short Stories
零和短編集　10

むすめ　めがたきうち
娘女敵討

濠門長恭

○

目次

速習切望……三
肌傷修行……二四
緊褌坐臥……四〇
執着粉砕……六五
婚礼討入……八五
永年修行……九三
後書き……九六

神崎外流

剣術指南、よみかきそろばん

用心棒、助人、人探、猫探

其他諸々承候

道場主　紫里兵之輔

その娘は看板の前に立ち尽くして、何度も一文字ずつを目で辿っていた。百姓娘らしい粗末な身なり。不相応に大きな葛籠を背負い、三尺近い長さの細い菰包みを胸の前に抱いている。

やがて、踏ん切りがついたのか。大きく息を吸い込むと、古びた板塀に囲まれた門をく

ぐった。殺風景な庭を進み、破屋（あばらや）とまではいわぬが、どことなく荒涼とした屋敷の玄関口に立った。

速習切望

「御頼み申します。弟子入り志願の者にございます」

若い娘の声に、兵之輔（ひょうのすけ）は小首を傾げた。「お願いします」ならば、月に一度や二度はある「其他諸々」であろうが、わざわざ「弟子入り志願」とは――それも、女人が。当道場の門弟は近在の農民が五人、それだけである。最後の入門者は二年前。

玄関で娘を迎えて、武家の子女だろうとひと目で見て取ったのは流石ではあった。年の

頃は笄を挿し初めて二年あたりか。番茶ではなく、玉露とまではいかぬにしても煎茶といったところ。

註記

ちなみに、破瓜というのは本来女性の年齢を表わす言葉である。瓜の字を分解すれば、八と八。足して十六。それを破る（越える）という意味である。これがロストバージンを表わすようになったのは、昔も今も、そのくらいが適齢ということであろう。余談ではあった。

その美しく整った顔は陽に焼けておらず、しかし指は家事で幾らか荒れている。

「切紙の腕を持つ男に、せめて一太刀を浴びせられるだけの技を、ひと月の内に御教授願えぬものでしょうか」

逡巡は門前でたっぷり済ませてきたとでもいうように、座敷で兵之輔と向かい合うなり、娘は単刀直入に突っ込んできた。

「む……」
これほどまでに明確な、そして曖昧な目的を持つとは、この娘は何者であろうか。兵之輔の関心はそこに向かった。
「一太刀とは穏やかでない。たとえ返り討ちに遭わずとも、無事には済まぬぞ」
「元より。敵(かたき)を討って、なおも生き恥を晒すつもりなどございませぬ」
訳が分からなくなった。敵討は武家の誉れ。それを生き恥とは。
兵之輔の困惑を察したのだろう。娘は顔を伏せて、硬い声でつぶやいた。
「私は徒士頭、小森重太夫が娘、美代にございます」
そんな下っ端侍など知らぬ――と、口の端に出かけたところで思い当たった。
「まさか、カ……」
カワラケホトサラシなどと口走らぬだけの分別はあった。

破落戸(ごろつき)どもに手篭めにされたばかりか、朱に染まった無毛の女陰も露わに、河原で晒し者にされた娘。夜が明けて最初に美代を見つけたのは、地回りの十手持ちだった。本役の旦那にも検分していただかねばならねえからと、全裸で大岩に縛りつけられた美代をそのまま晒し続けて、集まってきた野次馬を追い払いもしなかった。美代が舌を噛まなかったのが不思議なくらいの追い恥であった。そのあれやこれやを瓦版にまで書かれて、まだ人の噂の七十五日も経ってはいない。

「敵(かたき)とは……破落戸どもをつきとめたということですかな」

咄嗟に取り繕ったまで。破落戸風情が剣術の切紙でもあるまいに。

「敵討です」

美代は顔を上げて、きっぱりと言い切った。

「遺恨だけではありません。小森の家に婿を迎えるなど叶わなくなりました。家を滅ぼし

た敵を討つのです」
なるほどと、兵之輔は一応の納得はする。傷物にされたばかりか世間に生き恥を晒した娘の婿になろう者など――居るとすれば、百石の扶持に釣られた打算の輩。小森の当主が武士であるなら、そのような男に家督を継がせるわけにはいかぬであろう。
「女の敵を討つのです。いわば女敵討（めがたきうち）です」
「ふうむ」
もちろん。美代の言葉は正しくない。女敵討とは、妻と通じた間男を夫が私怨で討ち果たすことである。とはいえ、美代の言葉にも一理はある。家を滅ぼされたのであれば、まったくの私怨ではない。ともかくも。遺恨を晴らすなどという言葉では間に合わないほどの怒りが、美代にあえて『敵討』と言わせたのであろう。
しかし。美代が本懐を遂げたところで、当人の雪辱はともかく小森家の不名誉は拭われ

ない。いささかでも汚名を雪ぐには、理不尽ながら、操を穢された娘が自害するしかないだろう。

「しかし、破落戸を手ずから成敗なさらずとも。町方に任せておけばよろしいのではありませぬか」

女の恨みの骨髄など分からぬとは思いながら、兵之輔は分別めいた物言いをしてみた。

「私を辱しめた者どもなど、気違い狗のようなものです」

そういった難儀に遭わされた娘に「犬に噛まれたと思って」などと、慰めにもならない言葉を掛ける阿呆も少なくないが、当人が口にするとは――などと苦笑する間もあらばこそ。

「敵（かたき）は、かつての許婚者（いいなずけ）、田上忠則です」

兵之輔は意表を衝かれて、美代の次の言葉を待つしかなかった。

「彼の者が破落戸どもをけしかけ、いやでも人の噂に立つようにしてのけて、それを口実に破談としたのです。そして、何食わぬ……」

美代は言い淀み、なぜか蒼白の顔に羞恥の血色を浮かべた。

「ひと月後には、立花家に婿入りします。二百石に鞍替えしたのです」

兵之輔は、田上忠則という男を知らない。これまでの美代の話から推測するに、小さな家の冷や飯食いであろう。何流か知らぬが、切紙程度なら武を買われてではあるまい。よほどに才覚があるのだろう。次男坊、三男坊はたいていの家に居るが、婿養子を取ろうという家は、そうそうありはしない。

「ひと月のうちにとおっしゃいましたな。まさかに、婚礼の場に討入を掛けるおつもりか」

美代の表情に思い詰めた色を見て取っての軽口だったが、返ってきた言葉には絶句するしかなかった。

「その通りです」
兵之輔は、美代の言い分を吟味してみた。
操を穢されたばかりか、その無惨な姿を衆目に晒されたとなれば、破談は当然である。しかし田上忠則が、路傍に転がっている石を拾うように短時日で婿養子の鞍替えを出来たというのは、あまりに不自然ではある。二百石の話がまとまるので百石の話を無理矢理に壊した――そう勘繰って当然ではあろう。勘繰るだけならば。
「田上が裏で糸を引いていたという手証はお有りでしょうね」
「ございます」
「それは、どのような」
今度は羞恥の色どころではなかった。美代の顔が紅潮した。
「それを……申し上げねばなりませぬか」

「他人に害を為そうとして、その技を教えよと言われる。得心できぬ限りは、お断わり致す」

よほどに羞ずかしいことなのであろうが、美代の逡巡は短かった。顎を引き兵之輔の目を見据えて。

「私に乱暴を働いた者どもは、私が娘ではないことも、かわらけであることも、知っておりました」

「……」

手証とは、誰もが手に取って確かめられる確かな証拠という意味である。破落戸どもが知っていたという美代の言葉は、不確かな証拠ですらない。それを知っていたというのが事実としても、それが田上と、どう結びつくのか。

「かわらけのことを知っているのは、父母の他には一人しかおりませぬ。もうひとつにつ

いては、その一人のみです」
謎解きか――兵之輔はしかし、女の深い羞じらいの中に、およその答を察したのだった。田上某は、「いずれは夫婦になるのだから」などと言い含めて、すでに美代を抱いていたのだろう。ならば、彼女がかわらけであると知っているのも当然。
先ほどの不可解な一瞬の羞恥も理解できた。何食わぬという言葉で美代は、己れが食われたことを想起したのであろう。
とはいえ、推察で進めて良い話ではない。兵之輔は、残酷な質問を放った。
「破落戸どもが知っていたというのは、彼奴らが明言したのでしょうな。うろ覚えでもよろしい。どのように話していたか、それをお聞かせ願いたい」
「ダンナノイッテタトオリダゼ。アナガトオッテヤガル。最初の男が、確かにそう言いました」

美代の顔から羞恥が消えて、氷のように冷たい怒気に覆われていた。
「ウマレツイテノカワラケダッテンダカラナ。ミセニデリヤア、サゾウレッコニナルダロウゼ。そうも言いました」
これは――兵之輔は瞠目した。修羅場のさ中に、これほどまではっきりと加害者の言葉を覚えているとは。十五のときに逢引中を与太者に絡まれ、相手が匕首を抜いたので、その手首を斬り落とした――などというのは数えずに、二十八の今日までに、兵之輔は死地を三度経験して四人を斬っている。そのうち二人は、必殺の斬撃を放つしかない強敵であった。彼らがどのように動き己れがどのように対処したかは、すべて克明に覚えている。しかし、戦いの最中に発した言葉など、己れのも相手のも、およその内容すら怪しい。
この一事をもってしても美代には天稟があると、兵之輔は断じた。日常の場においてはまったく不要な、女としての幸せをつかむには邪魔にさえなる天稟が。

「如何にも、敵が切紙であろうと目録であろうと、一太刀を浴びせる技くらいは伝授して差し上げること、不可能ではない」

兵之輔が熟考の末に放った言葉に、美代は顔を引き締めた。眉に唾を付けたというほうが当たっているかもしれない。

おそらく。城下にある道場の門を敲いて回って、門前払いを食わされた挙げ句に、御城から一里も離れた横河村にぽつんと佇む、剣術道場だか寺子屋だか万屋だか分からないここまで流れてきた。大方はそういうことだろうと、兵之輔は見当を付けている。安請合いをされて、疑心が先立ったとしても無理はない。

兵之輔には、十分な成算があった。と同時に十二分でも足りない邪心もあった。

「改めて尋ねるが、武技の心得はあるかな」

訪なった女人にではなく、師が弟子に対する言葉遣いに、すでになっている。

「貫魂流の懐剣術を幾らかは。同門の三両切紙には勝てると自惚れています」
美代が習っていた流派では、型さえ覚えれば三両の免許料で切紙を頂戴できる。御嬢様切紙とも嫁入切紙とも揶揄されている。腕にいささかの覚えはあるが、家計を逼迫させてまで切紙など不要――寡黙にして雄弁な娘ではあった。
「まずは腕前を見極める。道場へ来られよ」
立って、さっさと道場へ向かう兵之輔。美代は葛籠を胸に抱き、その上に細長い菰包みを載せて兵之輔を追う。
兵之輔は一段高くなった見所（けんぞ）に座して、目の前に正座した娘にとんでもない言葉を放った。
「着物を脱いで素裸になりなさい」
「え……」

言葉の意味までは解しても、それが己れとどう関わってくるのかが分かりかねている、ぽかんとした表情。

「身体全体の動きや筋肉の使い方を見るためです」

直に見なくても衣服の上からでも、末端の動きを見れば根本も粗方は分かる。それを敢えて脱がそうとするのは、九分までは邪心、さらに言うなら嗜虐であった。そして残りの一分は、『肌風』であった。

素肌に太刀風を三寸どころか尺余に感じて、一寸ではなく皮一枚で見切る、肌の鋭敏な女人にしか為し得ないという秘剣。父が興した神埼外流の祖となった神埼古流で、父の若き頃でもとっくに術者は絶えて伝説となっていた。

そのような秘術を、御嬢様切紙ちょぼちょぼの娘が短時日で体得できるはずもない。兵之輔の成算は別辺にある。ただ、幾らかは心の疚しさを誤魔化せた。

これまでは決心の早さに兵之輔を瞠目させていた美代が、心の臓が百を拍つほどにも逡巡した。困惑から羞恥、羞恥から遺恨、そして決意へと――それは兵之輔の推測であって、うつむけた表情は能面のように硬く静かだった。

やがて、美代が立ち上がった。

「お目を汚します」

硬い表情で帯を解き、対丈の着物を脱げば、下は膝丈の赤い腰巻のみ。襦袢などは身に着けていなかった。本気で水呑百姓の娘に扮していたのである。

その一事をもってしても、美代の決意は本物であると、兵之輔は感じ入った――以上に、好色を刺激された。

現代の読者に理解しやすくたとえるなら。清楚な御嬢様学校に通っている彼女が、セーラー服の下にインナーを着けていないと知ったときの興奮――では、作者のレトロ感覚を

暴露するだけであろうか。
脛まで曝した腰巻一枚。
「この姿で型を御覧に入れれば、よろしいのですか」
「うむ……」
みずから仕掛けた悪戯に怯みながらも、なんとか道場主の威厳を取り繕う兵之輔。
美代は携えてきた葛籠から懐剣を取り出して左手に持ち、兵之輔の前に右半身（はんみ）を曝して立った。
「鋭ッ」
可憐な気合声と共に懐剣を逆手に抜いて、迫りくる刃を受け流す型を演じた。順手に持ち替えて右半身に構える。袈裟懸けに斬ってくる見えない刃を受け、上段からの斬撃を防ぐ。

それなりに出来た動きではあったが、実戦なら最初の一撃で懐剣は弾き飛ばされ、そのまま斬られてしまうか、押し倒されて若い娘に相応しい扱いをされるか。
兵之輔はわずかに顔をしかめ、それから鼻翼を広げて太い息を吐いた。剣術の心得がある男に対して一太刀を浴びせられるところまで仕込む前途遼遠を憂い、しかし、未熟を口実に非常の手段を講じる愉悦を思ってのことだった。
「衣服を改めさせていただきます」
型を演じ終えると、当然だが美代は肌を隠す。
もったいないと思いながら、とりあえずは止める口実も無い。
「そこの菰包みは大刀と見受けるが」
再び向かい合って座して、答を知りながらも兵之輔が尋ねる。
「はい。懐剣では切っ先が届かぬと思います」

「うむ。理に敵った考えである」
重々しく頷いたが腹の底では――理詰めで納得させればかなりのことまで受け容れるだろうとほくそ笑んでいる兵之輔だった。
「では、ひと月限りの入門を認める」
ひと月で業を修めたいと願うのだから、それを叶えてやるという意味であり、同時に、それ以降に何をしようと当道場は与り知らぬという逃げでもあった。二百石の跡取りに大怪我を負わせたとばっちりなど真っ平御免だ。
などという思惑を知ってか知らずか、美代は畳に両手を突いて深々と頭を下げた。
「さて……仮初にも入門となると、束脩であるが」
兵之輔がもったいをつけて言葉を切った隙に、美代が葛籠から切餅を取り出した。一分銀百枚。小判にして二十五両である。

束脩が酒や白扇であったのは百年以上も昔の話だが。地獄の沙汰も金次第の世であるとはいえ、束脩に加えて月々の謝礼五年分でも釣りがくる。

「これは多すぎる」

兵之輔としては、内弟子の形にして束脩無用の代わりに家事一切を任せ、成り行きによっては夜這いなどと目論んでいたのだから、へどもどしてしまった。

「是非とも、お納めください。これは、田上の家から投げられた金子です。これで我が家を潤すなど、我が身を女郎に売るよりも浅ましいことです」

手切れ金ということだろう。

身売りも親孝行のひとつではあろうし、草をかじらず白米が食えるのだが――貧乏とはいえ武家の娘に、そこまで考えよと求めるのも無理だろう。兵之輔は、黙って金子を受け取って――神棚に奉じたのは、すぐにも稽古をつけてやる所存だったので、邪魔になるか

らだった。
　とはいえ、その前に。
「わずかひと月で、それなりに大刀を扱えるようになり、かつ、剣術の心得がある男に一太刀を浴びせられる技前と気構えを練る。非常極まりない修行になるぞ。婿を取れず嫁にも行けぬ身体になる。それは覚悟していただく」
　兵之輔の言葉を受け止めて。それまでは硬い決意を覆っていた能面に、嘲りの色が滲んだ。
「元より穢された身なれば、それが束脩の足しになると思し召しでしたら、如何様にも」
　やはり、そのように受け取るかと、それは予期してのこと。その覚悟に肩透かしを食わせ、まったく別の方角から嬲る。それも嗜虐のあり方だ。
　などと、その道の通ぶってみたところで。実際に女を（ただ抱くのではなく）堪振り嬲

ったことなど、五指もあれば足りる。百姓弟子からの付け届けで食うに困りはしないが、用心棒といえば隠居連が維尽島(いつくしま)詣する折の世話役だったり、猫探しなどを瓦版の隅に書いてもらえば足が出る。傷が治るまでの花代に色を付けて蹴転(けころ)女郎を折檻するだけの金も工面できない。近在の素人娘に手を出したりすれば、おんぼろ道場など文字通りに潰されてしまう。

もっとも、それだけに。いろいろとこじらせているのではあるが。

肌傷修行

「さっそくに修業を始める」

まずは下準備。兵之輔は見所の奥に置いた刀掛から大刀を取り上げた。

「向後、一切は真剣にて行なう。美代は持参の刀を使え」

甚振る相手には名前を呼び捨てがふさわしい。そして、弟子にも。

二人は四間の間合を取って向かい合った。ともに中段の構え。兵之輔は稽古着に着替えているが、美代は百姓娘の姿のまま。兵之輔は襷も掛けさせなかった。この姿で稽古を進めるつもりなど微塵も無いからだ。

「俺は受けるだけにする。決して斬り付けはせぬから、安心して掛かってきなさい」
兵之輔はふだんは『儂』を使っている。含むところがあるときは『某(それがし)』、やや目上に対しては『拙者』、それより上には『私(わたくし)』である。『俺』は、妓を買うときくらいしか使わない――とは、美代が知るはずもない。
四間は、間合としては遠すぎる。美代は摺り足で慎重に前へ進んで。
「やああっ」
大刀を握る両手を顔の高さまで振り上げて斬撃を放った――つもりなのだろう。
がつん。
切っ先は、兵之輔の足元から一尺も離れた床を打った。刃筋が立っていないから食い込みもしない。
「今一度」

兵之輔に叱咤されて、美代が後ろへ引いて構え直す。眦を決して踏み込んで、大刀を振り下ろした。

ちいん。

わずかに兵之輔の刀に切っ先が届いて、やはり床を打った。力みかえって、肝心の握りがおろそかになっていたのだろう。美代は刀を取り落としてしまった。

懐剣とは間合が異なるが故の醜態ではない。

「たとえ斬り掛かってこぬと分かっていても、真剣は恐ろしかろう」

真剣で対峙すると、対手との間合が極端に近く感じられる。次の瞬間にも斬られるのではないかと恐怖する。まして、美代は女。兵之輔はずっと大きな男。切っ先が相手の刀に届いただけでも上出来である。しかし、兵之輔は褒めない。

「まずは間合を肌に感じること。真剣を恐れぬこと。そこから修行せねばなるまい」

うつむいて立ち尽くす美代を置いて、兵之輔は台所へ向かった。薪割の鉈も庭掃除の箒も、たいがいの荒物は台所の隅につくねてある。兵之輔は荒縄の束を取って、道場へ戻った。

「素裸になりなさい」

同じ言葉だが、今度はあまり気負わずに言えた。

美代も、先ほどの躊躇いは見せず、それでも全身を桃色に染めながら着物を脱いだ。

早くも狎れてしまったかと。兵之輔にしてみれば――やり易くなったという想いと、物足りない想いが半々。腰巻も取れとまでは、命じない。命じる必要が無くなるからだ。

声が上ずらないように気をつけながら、美代を道場の隅にある柱の前に立たせて。背中に柱を抱く形にさせて、手首を素早く荒縄で縛った。

「何を……なさるのでしょうか」

裸で縛られて、目の前にいるのは十幾つか年上の男。ふつうなら、生きた心地もないところだが。これも修行のうちなのかという想いが、美代の言葉を抗議ではなく問にさせている。

まだ早いとは思いつつ、兵之輔は逸る心を押えられなかった。

「こうするのじゃ」

美代の腰を包んでいた布を、乱暴に毟り取った。

「あれ……おやめくださいませ」

声が、はっきりと悲鳴になって裏返る。

兵之輔は、もはや引き返せぬ一線を越えた思い。美代の正面に立って大刀を正眼に構える。

「……」

ただの狼藉ではなさそうだと、美代も息を呑む。
両手の裡に生殺与奪の剣を握り締めて。ようやくに兵之輔は、嗜虐に猛りながらもこれまでよりは落ち着いた眼で、美代の裸身を眺めた。
破落戸どもに襲われた一件を除いても。すでに幾度かは元許婚者に抱かれているだろう女体は、匂い立つばかりの色香を放っている。起伏に富んだ裸身を『鳩胸出っ尻』などと謗る向きもあるが、兵之輔はそのような雅趣を持ち合わせていない。たわわな乳房も、次々と子を産みそうな腰も、すぐにでもかぶりつきたい。とはいえ。
これは難儀そうな――と、これからしてのける所業にいささかの不都合も感じている。しかし、それは些末事。しくじったところで、たいした事にはならないはずだった。
それよりも。その熟れた女体が、ひどく幼く見える。もちろん。あるべき物があるべき所に無いという、その一事が、そうせしめている。まさしく、かわらけであった。いや、

釉薬をふんだんに乗せた白磁の肌。隠しようのない紅い淫裂。ふっくらと盛り上がりながらぴたりと閉じた、童女とも見紛う一本の筋。それほどに使い込んでいない証左だった。

そこを指で穿ちたい。いや、切っ先で抉じ開けたなら、娘はどのような羞恥を見せるだろうか。それとも、淫裂の上端に潜む蕾を探り当て、切っ先でつついたなら……

兵之輔は頭を軽く振って、先走る妄想を追い払った。対手に切っ先の恐怖を突きつける正眼から構えを中段に下げて、じわりと間合を詰める。撃尺の間合をじゅうぶんに確かめてから、刀をやや引いて脇構え。

空振りに終わろうものなら面目を失する。斬りつけが深ければ……実は、たいしたことにならない。この刀は実のところ刃挽してある。撃ち込んだところで絞れば、肌に軽い打ち傷をつけるだけで済む。しかし、早々に種明かしをしてしまえば、修行にはならない。

兵之輔は己れの嗜虐欲を満たすと同時に、美代の切望をも叶えてやる心算でいるのだ。

初めて真剣で立ち会ったときよりもいっそうの、ほとんど恐怖を感じながらも。
「むん……」
兵之輔は美代の白く絖らかな腹部を切っ先で薙ぎ払った。二十年の修業のすべてを太刀筋に乗せて。
「ひいっ……」
か細い悲鳴を上げた美代は、信じられないといった表情で、己れの腹に視線を落とした。乳房に遮られるので、身を乗り出して――はっと息を呑んだ。
美代の腹は切断されていなかった。が、深紅の一筋が刻まれていた。刃挽してあっても、先端は尖っているから錐と同じ切れ味がある。
「これしきのことで、魂消るでない」
股間に込み上げる熱い疼きを懸命に抑えながら、兵之輔は声に威厳を乗せて、左脇に刀

を構えた。
「背筋を伸ばしておれ」
兵之輔の意図を悟って、美代が上体を起こした――ところへ。
「むん……」
白刃が風を斬り肌を裂く。
「く……」
美代は歯を食い縛って、恐怖と痛みに耐えた。しかし、蒼白の顔に羞じらいの色味を取り戻すまでの余裕はなかった。
「むん……むん」
兵之輔は立て続けに刀を振るって、美代の白い柔肌を朱に染めた。
「斬りつけてくる白刃に慣れろ。たとえ腹を切り裂かれようと、背骨を断たれでもせぬか

ぎり、一太刀を浴びせることは出来る」
死兵と化せば、技量の差など取るに足りない。それは真実であるが、兵之輔は己れの嗜虐を獲物に受け容れさせる口実にしただけである。しかし、美代はそれを信じ込んだ。
「はい。白刃など恐れませぬ」
その気迫に、兵之輔は鼻白んだ。と同時に嗜虐の炎を燃え上がらせた。この辺の機微は、クッコロとして読者にはお馴染みであろう。
「善き哉」
兵之輔は八双に構えてさらに一歩を踏み込み、万一のときは刃挽が美代を護るだろうと――左肘を折り畳みながら、乳房を袈裟斬りにした。
「ひっ……」
しゃっくりのような小さな悲鳴だけで耐えた美代の乳房に、つうっと紅い筋が斜めに奔

った。
「ふう……」
兵之輔が、詰めていた息を吐いた。なだらかな腹に比べて、盛り上がった乳房は皮一重を斬りにくい。じゅうぶんに自信があったとはいえ、ちょちょいのちょいと出来る技ではなかった。それに比べれば。
「むん……」
「ひいっ」
上乳を水平に引っ掻くなど、しくじりようがない。しかし美代にしてみれば、目の前を白刃が掠めるのだから、生きた心地も無かったろう。
「真剣での果し合いは、技量ではない」
刀身に拭いを掛けて鞘に納めながら、兵之輔がもっともらしい講釈を垂れる。

「迫りくる白刃に怯まぬ胆力。返り討ちを恐れず踏み込む気力じゃ」
間違ったことは言っていない。せいぜいが竹刀で叩き合いくらいしかしたことのない者同士が真剣で立ち会うときには、至高の真理である。
兵之輔は美代を柱に縛り付けたまま、また台所へ引き返して、焼酎を入れた四合徳利を持ってきた。金創軟膏や晒布は小箱にまとめて、見所の隅に用意してある。
先に焼酎も用意しておくべきであったと、いささか不手際を反省しながら、美代の正面に立つ。焼酎をたっぷりと口に含んで――傷口に吹き付けた。
「くううう……」
傷口に沁みる痛みは、一瞬の剣尖と異なり長く続く。むしろ、こちらのほうが耐え難い痛みである。しかも兵之輔は、傷をじゅうぶんに消毒する態を装って、掌で腹を撫で乳房に指を食い込ませる。

兵之輔は片膝を突き腰を引いて、袴が盛り上がらぬように気をつけている。猛りに猛る逸物を女淫に突き立てたい。いや、美代を座らせて、おそらくは初物であろう朱唇を犯したい。その想いを懸命に堪えている。

たっぷりと柔肌を両手に堪能してから、焼酎で薄まった血を晒布に拭き取り、またも素手を使って金創膏を塗り込めてやる。

美代はときおり呻き声を漏らしながら『手当』に耐えている。

傷を晒布で巻き終える頃には、兵之輔の股間も平静を取り戻していた。おもむろに稽古着を脱ぐ。

「まあ……」

美代の目が、兵之輔の胸と腹に刻まれた無数の薄い刀傷に奪われた。

「俺が父からこの修業を授かったのは十二の歳だ。まあ、男の俺にとっては誉れの向こう

傷ではあるがな」
嫁にいけぬ身体にするとはこのことだと、言外に含ませる。事実ではあるが、なろうことならば、より直截な良からぬことまでと目論んでいるのだから、信頼を得るための詐術でもあった。
兵之輔は己れの衣服を改めてから、ようやくに美代の縄をほどいてやった。美代が粗末な身なりを整えるのは、黙って見ている。焦らずとも良い。
美代が、あらためて兵之輔に向かって正座する。
「お願いでございます。私を道場に住み込ませてくださいませ」
「うむ……」
兵之輔は考えるそぶりをしたが、元よりそのつもりである。手元に置いて、あれこれと甚振る――という良からぬ目論見はもちろんだが。美代にしても、他に方途は無いはずだ。

二十五両もの大金を持ち出している。家に戻れば、当然に追及される。それだけではない。百姓娘に扮していたということは、田上にその挙動を怪しまれているからだろう。男に一太刀を浴びせたいなどと言って道場を訪ねれば、安云州（あくも）随一、日の本を見渡しても五本の指に入る大きな広島城下とはいえ、噂はすぐにも広まる。この道場を訪ったのも、あるいは見られているかもしれない。

通い稽古など、破落戸どもにもう一度犯してくださいと懇願するも同然だろう。

「しかし、女の内弟子とは尋常ではない。それはそれで、噂にもなろう。表向きは新たに雇い入れた下女ということに致す。よろしいか」

咄嗟の機転――ではない。住み込ませて、家事全般をさせるだけではない。夜とはいわず、気が向いたときには存分に甚振れる女。常日頃の妄想が、まさに実現しようとしているのだ。

とは知るはずもなく。美代は深々と頭を下げた。
「はい。よろしくお願い申し上げます」
兵之輔の思惑はともかく。まさか最初からひとつ部屋に寝かせるのは拙かろう。
道場の左手は物置を兼ねた広い台所。右は座敷と寝所。寝所に引き入れるわけにはいかず、弟子を上座に当たる座敷で寝起きさせるのも、おそらく当人が恐縮するだろう。どうせ台所は任せるのだからと、その一画を美代の居場所と定めた。布団だけは客用のそれを貸し与えたが、身の回りの品までは世話をしてやる必要もなかった。不相応に大きな葛籠に、美代はそれらの合切を詰め込んでいた。
そうして。美代にとっては修行の日々、兵之輔にとっては嗜虐妄想を満たす日々が始まったのである。

続きは製品版をご購入下さい。